

「モデル」の伝播

—ハンス・メムリンク作《ダンの三連画》とイングランドにおけるフランドル美術の受容をめぐって

今井澄子(大阪大谷大学)

ファン・エイク兄弟やフレマールの画家に始まる初期フランドル派の絵画が他の地域に及ぼした影響については、近年ますます注目を集めている。たとえば、ブリュージュ市立美術館において開催された展覧会では、初期フランドル絵画の造形がアルプスの南や中欧地域へと波及していくさまが詳細に示された(2002年、2010~11年)。他方で、初期フランドル絵画のイングランドへの伝播については、現存する板絵が少ないこともあり、十分に検討されてきたとはいえない。だが、写本やタペストリーなども含めて検討することで、イングランドに受容されたフランドル美術の特徴を包括的に捉える余地は残されているように思われる。本発表は、その試みの一環として、ハンス・メムリンク作《ダンの三連画》(ロンドン、ナショナル・ギャラリー)と、ダンが所蔵した写本群の図像と機能をめぐらる問題に焦点を当てる。

《ダンの三連画》の注文主ジョン・ダンは、イングランド王エドワード4世に仕えた宮廷人にして外交官であり、1468年にはブリュージュで開かれたブルゴーニュ公シャルルとマーガレット・オブ・ヨークの結婚式にも出席した。《ダンの三連画》はその後、1470年代頃にブリュージュの画家メムリンクによって制作されたと考えられる。先行研究は、大きさや型式から、本作品を私的な祭壇画とみなしてきた。また、図像に関しては、聖人や天使が聖母子を囲む構図や牧歌的な風景描写などが、他のメムリンク作品からの引用・改変であることが指摘された。ところが、中央パネルの最前列で跪く祈禱者たちの姿は、その配置や服装により強調されているにも関わらず、とくに注目されてこなかった。このような表現は写本挿絵中のダンの姿にも認められるが、祈禱者像が元来、崇敬対象に対する敬虔さを示すために控えめに表わされたことに鑑みるに、等閑視されるべきではない。

本発表では、まず、ダン夫妻の祈禱者像が、初期フランドル絵画の伝統を踏まえつつ、当時この地を支配したブルゴーニュ公シャルル夫妻の姿を「モデル(模範)」としている点を指摘する。さらに、ダンが公妃マーガレットから「真の友」と記された写本を贈られたり、イングランドの宮廷においてブルゴーニュ宮廷が手本とされたという状況を踏まえ、ダンが、ブルゴーニュ宮廷の流行を取り入れることで、イングランドでの自身のステイタスを高めようとしていたことを示す。たしかに、ダンが入手した写本は、後にイングランド王の手に渡るほど価値のあるものだった。それゆえ、《ダンの三連画》とダンが入手した写本群は、私的な祈禱のためだけでなく、ダンとその家族のステイタスを誇示しつつ、フランドル美術のイングランド伝播に寄与するという社会的役割をも担っていたとみなすことができるだろう。